九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

北野克氏蔵「末摘花・紅葉賀断簡」について：『源氏釈』原型本の推定

田坂，憲二

https://doi.org/10.15017/2332675

出版情報：文學研究. 79, pp.177-193, 1982-03-30. Faculty of Literature, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

北野克氏蔵「末摘花・紅葉賀断簡」について

――『源氏釈』原型本の推定――

田坂憲二

高野辰之博士旧蔵北野克氏御所蔵の「源語之類書」との附箋を有する古写本は、源氏物語の梗概を述べながら若干の引歌・引詩の注を含むもので、末摘花巻の後半と紅葉賀巻々頭の一部を有する残存本である。同書は、最近、北野氏御自身による解題が附された影印・翻刻が刊行され、[1] 源氏物語享受史上重要な資料が広く一般に公開された。

筆者も、該本が、源氏物語の梗概を記したものとしては、鎌倉時代写と書写年代が極めて古いことに注目し、同時代の天理本『源氏古鏡』に関連して、その存在に言及したことがある。[2] その後、当該本についての調査を行い、同書が、世尊寺伊行の『源氏釈』の一伝本であり、『釈』の成立にも大きな問題を投げかけるのではないかとの結論に至ったので、ここに私なりの調査の報告を行い、御批判を仰ぐものである。(猶、以下本稿においては、該本を『北野本』と略称する)

一

先ず、北野本の概要を記す。

桝型（一七・一×一六・一糎）胡蝶装の冊子本で、表紙は後補。内題なし。墨付全八丁。第一丁と二丁、第七丁と八丁は記述が連続せず、この間に落丁あり。第一丁は末摘花巻の中途（『大成』二一三頁に相当）より始まり、最終丁も紅葉賀巻頭近くで中絶。一面八～一〇行書、一行一五字前後。用字は漢字平仮名。和歌（引歌は除く）は改行、一字下げ二～三行書、地の文は後続しない。奥書・識語の類はない。[3]

その内容は、源氏物語中の語句や原文を巧みに取り入れながら（最も長い部分では、百字程の源語本文を纏めて引用する）適切な繋ぎの語句を挿み、的確に源氏物語の梗概を述べている。（具体的には28頁例参照）この間、源語原典中の和歌は、全てこれを記す方針を取っている。又、全七項目の引歌・引詩に関する勘注が含まれているが、これらは改行されることもなく、梗概叙述の地の文に接続している。

北野本が源語原典をどのように梗概化しているか、『日本古典文学全集』の段落見出し・源氏物語の和歌番号を指標とし、北野本の記事を行数で示し、量的に把握できるようにしたのが次表である。猶、併せて勘注に通し番号を付し、その所在を明らかにした。

次表から窺うことのできる北野本の梗概叙述の特色として、次の三点があげられる。

(1) 巻の主題とも言うべき、末摘花の容貌・行為の意外さとそれに惹起される笑いが述べられる〔一三〕〔一六〕が、比較的委しく書かれている。（猶〔一六〕は、和歌四首、勘注三を含むため、実際の梗概叙述量は半分程度である）

(2) 記述が一部に偏在することなく、ほぼ全体から梗概が取られており、物語の流れに添って、正確に全体像が把

丁	段落見出し	和歌番号	勘注	北野本行数
第1丁	〔八〕源氏、常陸宮邸を訪れ、末摘花に逢う（後半）	74		
	〔九〕源氏、二条院に帰り、頭中将と参内する			ナシ
落丁	〔一〇〕源氏、後朝の文を夕刻に遣わす	75		8
	〔一一〕行幸の準備に紛れて、源氏訪れを怠る			
	〔一二〕雪の夜に訪れ、女房たちの貧しき姿を見る			
第2丁～第7丁	〔一三〕翌朝、末摘花の醜き姿を見て驚く	77		23
	〔一四〕貧しき門番に同情、末摘花の鼻を連想する	78	①②	16
	〔一五〕末摘花の生活を援助、空蟬を思い出す			ナシ
	〔一六〕歳暮、末摘花、源氏の元日の装束を贈る	79 80 81 82	③④⑤	51
	〔一七〕正月七日の夜、源氏、末摘花を訪れる		⑥	12
落丁	〔一八〕源氏、二条院で、紫の上と睦び戯れる		⑦	10
第8丁	紅葉賀巻			
	〔一〕行幸の試楽に、源氏青海波を舞う			16

握できるようになっている。

(3) 北野本に採られていない〔九〕〔一五〕は、謂わば繋ぎの場面であり、梗概化に際しての適切な省略措置であ

る。

次に、具体的に〔一七〕の冒頭部分を採り上げて、北野本の梗概叙述の方法を見てみよう。

㋐さてほとひさしうなりて、㋑このすえつむつたへたりしたいふの命部、㋒あやしうかたはらいたきことの、㋓いとほゝるみて申せは、㋔れいのいたくえんなるらん、との給に、これとてたてまつりたる御文を見給へは、㋕いたくきにあつこえたるかみにほひはかりはふかくしみて、うたもてもよくかきあはせたり

からころもきみかこゝろのつらけれはたもとはかくそそほちつゝのみ

㋐は、前段との間に約四か月の日数の経過があることを明示するために、梗概叙述者によって挿入されたもの。しかも、この間に、源語原典の〔一六〕が略されているため、この語句は一層有効な働きをしている。㋑も同様に、以下の部分の主語を明確にするために挿入されたもの。と同時に「すへつむつたへたりし」と過去の経緯を改めて読者に想起させる役割を持つ。㋒㋓㋔は、源語本文の語句を摘出し繋ぎ併せることによって、原典の雰囲気をできるだけ活しながら、簡略化を行っている。㋕は、異様な末摘花の行為を印象づけるために、源語本文をほぼそのまま使用して、末摘花への和歌へと繋いでいる。即ち、北野本は、適切な説明的言辞を挿入すると共に、源語本文中の語句をできるだけ取り入れて、原典の趣きを正確に伝えようとしていると言ってよかろう。

北野本の、梗概叙述の部分の記述方法が卓抜なものであることを確認し、次節では勘注部分の検討を行う。

二

北野本には、引歌・引詩など七項目の注記が含まれているが、これらは、世尊寺伊行の『源氏釈』の注記と、ほぼ重るものである。『源氏釈』の記す所は、以降の古注釈書に継承されていくわけだが、北野本の書写年代である鎌倉期に成立した『奥入』（一・二次本）『永仁本源氏物語抄』『紫明抄』『異本紫明抄』などと比較してみると、部分的に

は共通する箇所もあるものの、注記の項目そのものに大幅な出入があり、注文も大きく異っており、『源氏釈』との間に見出せるような、密接な関係は存しない。

『源氏釈』の伝本は、従来知られていた書陵部本（明石迄の残存本）、前田家本（完本）の他に、最近伊井春樹氏によって紹介された『源氏或抄物』と題する書陵部新出本[4]（抄出本、但し末摘花はほぼ完全に引用されている。以下、書新本と略す）の三本が存在するのみである。[5] 北野本の残存部分に該当する『源氏釈』の全ての記述を取り上げ、項目毎に比較してみたのが次表である。

注記の項目	北野本	書新本	書本	前本
①幼き人は形かくれす	○	○	○	○
②波こすこゝの	○	○	○	○
③袖まきほさん人もなき身に	○	○	○	○
④色濃き花と見しかとも	○	○	×	×
⑤たたらめの花の色のこと	○	○	○	○
⑤′さえつる春の	×	×	○	○
⑥夢かとそ思ふ	○	○	○	○
⑦平中かやうに色とり	○	○	○	○

④⑤′の二項目の出入から、北野本と書新本との親近関係が想像できるのであるが、具体的に勘注の本文を比べると、そのことは一層明確になる。①②の例で示す。

①わかき人はかたちかくれすとすむし給ところは、ふんしゆといふふみの心也。（北野本）

○我き物はかたちかくれすとすむしたまふ所は、文集といふふみの心也。（書新本）
○わかきものはかたちよくさすとうちすんし給所、幼者形不蔽、老者體無温、悲端與寒氣、入鼻中 文書第三蕭中吟（書本）[6]
○わかきものはかたちかくさすとうちすんし給、文集第三秦中吟、幼者形不蔽、老者躰無温、悲端与寒氣、併入鼻中多。（前本）[7]
②たちはなのきのゆきにうつもれたるをすいしんめしてはらはせさせ給に、まつのはのをのれをきあかりてさとこほるゝも、なみこすこゑのなとみゆるを、㋐いとふかゝらすともなたらかにあひしらはん人もかなとみ給所は、我そてはなにたつすえのまつ山かなみこすこゑのはるゝひはなしといふゝる事の心也。（北野本）
○たち花の雪にうつもれたるを随身めしてはらはせたまふに、松の葉のおのれとおき返てさとこほるゝも、浪こすうへのなとみゆるを、㋐いとふかゝらすともなたらかにたにあひしらはん人もかなとみたまふ所は、我袖は名にたつすゑの松山か浪こすうへのこえぬ日はなしといふふる事の心也。（書新本）
○たちはなのきのうつもれたる随身めしてはらはせ給、㋑うらやみかほにまつのはのおのれをきあかりてさとこほるゝおとも、なみてすゝゑのとあるところ、わか袖はなにたつすゑのまつやまかなみこすこゑのこえぬまはなき。（書本）
○たちはなの木のうつもれたる随身めしてはらはせ給、㋑うらやみかほに松木のをのれおきあかりてさとこほるゝゆきも、なみこすこゑのなとおほゆる所は、我そてはなにたつすゑの松なれや浪こすこゑのきかぬ日はなし。（前本）

①では、北野本・書新本が「文集」という出典のみを記すのに対し、書本・前本では具体的に詩句を引用している。
②では、勘注の所在箇所を示す源語本文の引用部分で、北野本・書新本が㋐の部分を含んでいるのに対し、書本・前

本では㋑の部分を含むというように、引用の箇所でも細かな対立が見られる。又、②の「といふゝる事の心也」という語句は、北野本・書新本にのみ存するものである。更に、勘注の配列そのものに関しても、北野本・書新本が①―②の順であるのに対し、書本・前本では②―①の順で記されるという、明確な相異が見られる。（猶、この問題に関しては、五節参照）

以下⑥⑦の例は、北野本の勘注を掲げ、書新本の異文をカッコ内に示し、参考として前田家本を記す。（③～⑤に関しては次節参照）

⑥又すゑつむはなのもとへとしかへりて正月七日よさり（ナシ）をはしたれは、つとめてかへり給とて、またるゝものはさしをかれてまつ御（けしきのあらたまらむか）ゆかしきとの給へは、さへつるはると（いと）からうしてわなゝかしいてたまへり、されはよとしへぬるしるしはとていて給（いたう）うちわらひ（給）て、ゆめかとそおもふとくちすさみ給へり（ナシ）とある所は、しん（かみ）なり又しん（かみ）なりといふうた（事）の心也とやらん（ナシ）又、わすれてはゆめかとそおもふをもひきやゆきふみわけてきみをみんとはといふゝる（ナシ）うたの心に（ても）やあるらん

［参考・前田家本］　御けしきのあらたま覧なんゆかしきとのたまへは、さえつるはるはとあるは、もゝ千鳥さえつるはるはものことにあらたまれとも我そふり行。さもやとしへぬるしるしよとうちわらひて、ゆめかとそおもふとうちすんし給は、へんたいひんふんたり神なり又神なりしんせいえんてんすゆめかゆめにあらさるか

⑦又（ナシ）けんし（の君）むらさきのうへとてならひゑ（ナシ）なんとかきてあそひ給に、御（ナシ）はなにへにをつけさせ給たるをみて（ナシ）御すゝりのかめのみつにかみをぬらしてのこひ（はせ）給へは、へいちうかやうにいろとりそへ（ナシ）給へとあるところは、むかしの（ナシ）いろこのみへいちうか女になくよしみせむとてはすゝりのかめにみつをいれて（か）くしけるを、女こゝろえてすみをいれたりけるをれいのやうにかほ

（以下、北野本落丁のため脱。にぬりてかへりたりけるをみて女、我にこそつらき心をみすれとも人にすみつくかほのけしきよといふふる事の心也）

［参考・前田家本］　むらさきのうへにはなへにつけてみせ給所、御すゝりかめの水にかみをぬらしてのこひ給へは、平中かやうにいろとりかえ給なとあるは、平中みる女ことになくけしきを見せんとてすゝりかめにみつをいれてくしてめをぬらしけるを、女こゝろえてそのかめにすみをすりていれたりけるをしらてれいのやうにしてかへりけるみて女、われにこそつらさを君かみすれとも人にすみつくかほのけしきは

上例の如く、北野本の勘注は『源氏釈』の記述に極めて近く、就中、書新本とはほぼ完全に一致するのである。北野本の勘注と、書陵部蔵『源氏或抄物』は、共通の祖本から派生したものと考えるべきであろう。但し、両者の間には、直接的な親子関係はないと言える。例えば⑥では、北野本「よさり」書新本「けしきのあらたまらむか」の相互に補いうる箇所があるし、「しんなり」←→「かみなり」の対立は、中間に「神なり」という前本のような表記を介在させねば理解できないであろう。

ともあれ、北野本の勘注が、現存の『源氏釈』と同系統に属するものであることは確認できるのである。

三

次に、勘注部分のみならず、梗概叙述の箇所をも含めた、統一体としての北野本を『源氏釈』の一伝本として捉えることが可能か、検討してみる。それに先立ち、論述の必要上、従来の『源氏釈』に関する研究を押えておこう。

『源氏釈』の原型について、池田亀鑑博士[8]は、源氏物語本文の行間に注記を書入れたものが原型であり、量的にも現存のものより豊富であり、それを後人が任意に書き出し、一冊に纏めたものが、書陵部本・前田家本の祖本であるとされた。一方伊井春樹氏[9]は、後人が任意に書き出したにしては、書本・前本共に共通する記述が多すぎ、源語本文

の引用にも一定の型の存することから、両本共に伊行自身の手によって抽出されたものであろうとされた。更に氏は、新資料として『源氏或抄物』を提示され、これら三本を、一次本（一類本＝書新本、二類本＝書本）、二次本（前本）と、成立時点の相違によるものと位置づけられた。原典の引用・注記の異同・依拠本文等多方面から検討を加えた氏の論は間然する所はなく、池田博士の説は大きく修正されたと言って良いだろう。以下本稿も、伊井氏によって達成された成果に依拠して論を進めて行く。

さて『源氏釈』の三伝本は、何れも「……とは」「……といふところは」のように、注記の項目を列記する方法を取っており、巻全体の梗概を述べながら、その中で必要な部分に注記を加えていく北野本とは、構造を全く異にしている。具体的に、勘注③～⑤を含む、北野本の〔一六〕末摘花より元日の装束の贈られた場面を取り上げ、書新本の当該箇所の全文と比較してみよう。

北野本	書新本
（前略）つゝみにころもはこのいとこたいなるをつゝみてをしいたり。これをいかてかたはらいたく思侍さらん、ついたちの御そひとてかのみやよりさふらふめる、いかてかひきかくし侍ん、とてさしいてたれは、ひきかくされましかはいかによからまし、そてまきほさん人もなきみにとある所は、しらゆきは今日はな降りそしろたへのそてまきほさん人もなきみにといふゝることの心なり。をかしきかたにはこれもいるへかりけりとほゝえみ給。このふみのかたはしにてならひし給を命部そはめに見れは なつかしきいろともなしになにゝこのすえつむはなを袖にふれけん 又てならひもいろこきはなとみしかともなとかきけかし給といふ所は、くれなゐをいろこきはなとみしかとも人のあくにはかへらさりけりといふゝることの心也。このはなとかめそあるやうあらむとおもひあはする、いと	袖まきほさん人もなき身にてとある所は 白雪はけふはなふりそ白妙の袖まきほさむ人もなき身にといふふる事の心と也。 又手習に色こき花と見しかともなかきけし給そといふ所は紅を色こき花と見しかとも

をしくなりぬ。命部
くれなゐのひとはなころもうすくともひたすらくたすなをしたてすは
人〳〵まいれはありつる御さうそく、これとりてたさんや、かゝるわさは
人のするものにやとうめき給へは、あいなう我はつかしうなりぬ。さすか
にこの御しやうそくの返事、源氏
あはぬ夜をへたつるなかのころもてにかさねていとゝみもしみよとや
この御返事かきてたいふの命婦にとらせ給とて、たゝらめのはなのいろの
こと三かさの山のをとめをはすてゝとうたひすさみていて給といふこころ
は、なにの心にかたつぬへし。

人のあくにはかへらさりけ
りといふふる事の心也。
たゝ梅の花の色のみことみか
さの山とおとめをはすてゝと
うたひすさみていて給所は
なにの心にかたつぬへし

[参考・書陵部本] ③ひたちの宮より御さうそくしてたてまつらせ給、命婦人の御心にたかはしとて御らんせさせ給てこそはとき
こゆれは、ひきこめられたらましかはからまし、そてまきほさん人もなきみにとあるところ
しらつゆはけふはなふりそしろたえの袖まきほさん人もあらなくに
④ナシ
⑤その御返命婦になけ給て、みかさの山のおとめをはすてゝとうたひすさみていて給所
たつぬへし

即ち、北野本と書新本とは、全体の体裁は異るものの、北野本の一部分が書新本の全文とほぼ完全に一致し、見かけの上では、北野本の抜き書きが書新本のような形となっている。これは決して偶然の所為ではなく、両本の関係は、何れか一方のような形から他方が派生したと考えねばならない。つまり、次の二つの可能性がある。

(1)書新本のように注記の項目を列記したのが原型で、その各項目の間を源語の叙述でつなぎ、一冊の梗概本として作られたのが北野本の祖本である。

(2)北野本のように梗概を述べながら必要に応じて注記を加えたのが原型で、その注記の部分のみ抜き出し、一冊の

注釈書として纒められたのが書新本の祖本である。

一般的に考えて、注記を含む部分を抽出することに比べ、注記の間に梗概を挿入して繋ぎ合わせることの方が格段に困難な作業であることは容易に想像することができる。又、第一節でも述べたように、北野本の梗概記述の方法は卓抜なものであり、書新本の形を粉本として肉付けを行ったにしては、整いすぎているといえよう。具体的に前掲の表に即してみてみよう。

③の「そてまきほさん人もなきみに」と、その直前の「ひきかくされましかはよからまし」の部分は、源語原典でも直接続いており、④の「てならひも、いろこきはなとみしかともなとかきけかし給」も、その直前の源氏の和歌、直後の「このはなとかめ」云々の記述と、原典でも繋っているのである。又、勘注③に続く「をかしきかたにはこれもいるへかりけり、とほゝえみ給」は、原典では約百五十字後に見える文章であるが、これを若干変えてこの部分に持ってきて、「ひきかくされましかは……いるへかりけり」と、苦笑しながら述べられた源氏の言葉として統一しているのである。つまり、③④⑤の、書新本と重なる部分は、その前後の梗概叙述の文章と緊密に結びついており、この箇所が後記挿入されたとは考えにくいであろう。従って、(2)の考えを採るのが妥当であると思われる。

つまり、北野本は『源氏釈』の一伝本として認めるべきであり、現存三本との関係でいえば、書陵部蔵『源氏或抄物』(第一次本一類本系)に最も近く、同本の原型に当るものと考えられるのである。

四

北野本のような形から、書新本の祖本が派生したと考えられることは、『源氏釈』の成立事情に関して、極めて重要な問題を提起することになる。

従来、伊行は自己の所持本の源氏物語の行間に勘注を書き、その注を含む部分のみを抜き出し列記することによって『源氏釈』が成立したと考えられていたが、北野本の出現により、両者――注記書き込み本と、抜き書き本――の中間的な形として、換言すれば過渡的な形として、注記を伴った源語の梗概書的なものを想定する必要があると思われる。書陵部蔵『源氏或抄物』は、伊井氏によって一次本系一類本の略本として位置づけられ、『源氏釈』の最初の形態を部分的に留めていることが指摘されているが、北野本は明らかに同本の親本的位置にあるのである。とすれば、北野本は、最も原初的な『源氏釈』の姿を伝えるものではないかと考えられるのである。北野本の存在を考慮に入れ、『源氏釈』の成立を考えるとすれば、次のような形となろう。

伊行は、自注の書き入れ本を基にして、源氏物語中の全ての和歌と、自注を施した箇所を取り入れて、しかも巻全体の流れを過不足なく鳥瞰できる、一種の梗概書兼注釈書を作成した。これが『源氏釈』の最初の形態である。既知の『源氏釈』三本が、何れも注記列記型であることから言えば、原型本『源氏釈』又は、原『源氏釈』と呼ぶのが相応しかろう。この原型本の姿を今日に伝えているのが、北野本なのである。この、梗概＋注釈という方法に飽き足らなかったのか、或いは、更に簡略化する必要に迫られたのか、伊行は、この原型本から注記の存する部分のみをほぼそのままの形で抜き出し列記することによって、原型本とは異質の注釈書を作成した。これが伊井氏の言われる一次本一類本で、書新本の祖本に当る。注記の必要箇所と、その注記を列記する形に移行することによって、原型本『源氏釈』の持っていた梗概書としての役割は、ほぼ完全に失われた。一次本一類本のような注記を含む部分のみを列記し、梗概叙述には重きをおかないという形式を、自己のものとして確立した伊行は、この形式に即し、注記の内容の一層の充実を図り、「たつぬへし」と態度を留保していた部分に解答を与え、不適当な引歌・引詩を適切なものに改めるなどして、一次本一類本の改訂本たる、二類本・二次本などを作成していった。これが書陵部本・前田家本の祖本となる。

伊井氏によって確立された『源氏釈』の段階的成立という考えに依拠し、その最も早い時点に北野本を位置づけるとすれば、このような見取図ができるのではあるまいか。

原型本が『源氏釈』のどの段階にまで影響を与えているか、現存の北野本を見る限り、直接的には書新本を生み出したという事しか跡付けることはできないが、部分的には書陵部本にも、その影を落しているようである。北野本では、注記⑤の直前は、

あはぬ夜をへたつるなかのころもてにかさねていとゝみもしみよとや

この御返事かきてたいふの命婦にとらせ給とて、たゝらめの花の色のこと、三かさの山のをとめをはすてゝとうたひすさみていて給

とある。「この御返事」が、直前の「あはぬ夜を」を受けること言うまでもない。この部分を書本で見ると、次のようになっている。

その御返、命婦になけ給て、みかさの山のおとめをはすてゝとうたひすさみていて給

「その御返」とある以上、末摘花の「からころも」云々の和歌が前に記されていなければならないのだが、書本には存在しない。勿論、源氏の「あはぬ夜の」の和歌もないわけで、指示語「その」は宙に浮いた形となっている。これは、書本を執筆する段階で、伊行の脳裏には、北野本の当該箇所の記述が存在していたためではないだろうか。

原型本『源氏釈』が、その後の一次本・二次本の『釈』に与えた最も大きな影響は、源氏物語本文の引用形式である。

『源氏釈』では、注記の該当箇所を示すために源語本文を引用するが、その際に原文だけを引くのではなく一部分を梗概化して示し、注記の箇所が源語のどの場面であるか、容易に知り得るような形になっているのは、しばしば指摘されるところである。[10] 従って『源氏釈』は、中世の源氏物語梗概書の原流的立場にあるとも説かれている。このこ

とは、北野本の出現によって、明確に裏付けられるのである。即ち、原型本『源氏釈』は、注釈書であると共に、正に梗概書であったのであり、原型本を改編することによって成立した一次本・二次本の『源氏釈』は、注記の所在箇所を示す部分に、原型本の名残りを留めているのである。原型本においては、梗概書としての比重も半分を占めていたわけであるが、その役割を除き、注釈部分のみの充実を意図した一次本・二次本でも、原典引用の部分に、梗概書としての原型本の姿が、投影しているのである。

このように、北野本のような形を『源氏釈』の原型と考えることによって、現存三本の『源氏釈』の持っている、一種の梗概書的役割、中世の梗概書の先駆的位置を理解することができるのである。

五

次に、北野本によって解決できる『源氏釈』の問題点を二点あげておく。

『源氏釈』の依拠本文は別本系統のものであろうと、伊井春樹氏によって推定されているが、梗概叙述の多い——原文引用の多い北野本によって、そのことは若干補強できる。末摘花巻三例、紅葉賀巻一例を示す。

○かうしをㇾてつからあけ給て、まへのかれのゝせんさいをなかめ給。（中略）つねにつきせぬ御心のへたてこそなときこえ給

㋐を—別陽。ナシ—青・河・別御。㋑せんさい—別陽。せんさいのゆき—青・河・別御　㋒つねに—別陽。つねは—別御。ナシ—青・河。

○あさひさすのきのたるひもとけなからなとてつらゝのむすほをるらん、との給も、たゝうゝとうちわらひて・くちをしけなり

㋓も―河・別陽。は―青・別御。㋔ナシ―河・別陽。いと―青・別御。

○ころもはこの・いとこたいなるをつゝみて（カ）（キ）

㋕ナシ―別陽。おもりかに―青・河・別御。㋖いと―河・別御・別陽。ナシ―青。

○いりひのはなやかにさしたるに、かくのこゑまさりてものおもしろきほとに（ク）

㋗いりひはなやかにさしたるに―別氏。いりかたのひかけさやかにさしたるに―青・別御。入日のかけけさやかなるに―河。

次に、第二節で述べた、勘注①―②の順番が『源氏釈』の諸本によって異ることも、北野本を参看することによって解決することができる。

源氏物語本文の記述に従う限りでは、②―①が正しい順番であるのだが、北野本では、次のような記述になっている。

あさひさす……との給も、たゝうゝとうちわらひてくちをしけなり。

かとあくるをきなさむくたえかたけにて、あやしきものに、ひをいれてもたりけり。み給てけんし

ふりにけるかしらのゆきをみる人もをとらすぬるゝあさのそてかな

わかき人はかたちかくれすとすむし給ところは、ふんしゆといふふみの心也。

たちはなのきのゆきにうつもれたるをすいしんめしてはらはさせ給に（中略）なみこすこゑのなとみゆるも

（中略）我そてはなにたつすゑのまつ山かなみこすこゑのはるゝひはなしといふゝる事の心也。

A　B

源語原典では、ABの順で記述されているのだが、この場面で伊行が記載する必要のあったことは

㋐「なみこすこゑの」の引歌の指摘

㋑「ふりにける」の歌と、その歌が詠ぜられた事情

㋒白氏文集の詩句の指摘

である。原型本『源氏釈』は梗概書の役割も担っているので引歌引詩の他に㋑も又必要である。ところでこれら三項は、何れも末摘花の部屋を出た後、邸内の出来事であり、「あさひさす」の歌の後に、場面転換の言葉が必要であるのだが、「たちばなのきの」云々の前にそれを挿入すると記述が冗長になるため、「ふりにけるかしらのゆき」の歌の題材たる「かとあくるをきな」を持ってきて、舞台を「かと」の近くに移行させる役割も果させたのではないか。

ともあれ、北野本では、この場面が原典の順番とは入れ替っているのは事実であり、北野本祖本から注記の部分のみ抜き出した書新本祖本は、注記の順番も北野本のそれを踏襲しているのである。しかし、注記の項目だけの形となると、順番を入れ替る必要はなく、むしろ原典の記述の順に従う方が便利であったろうから、一次本二類本（書陵部本）では本来の順番に戻したのであろう。

六

最後に、北野本の資料的価値を纒めると、次の三点になる。

第一に、源氏物語研究史の始発に位置し、その重要性は説かれながらも、従来僅か三本しか報告されていなかった『源氏釈』に、新たな一本を加えることができる。

第二に、これが最も肝要な点であるが、北野本は、『源氏釈』の中では最古の形と言われていた書新本の親本的立場に当り、『釈』の最も原初的な形態を伝えていると思われる。つまり北野本は『源氏釈』の原型本と考えられるのである。この原型本は、源語の梗概を述べながら必要に応じて注記を加えていくというものであり、従来考えられていた、伊行の自注書入れ本から注記存在部分を抜き出すことによって成立したと考えられていた『源氏釈』の成立過

程は、大きく修正されねばならない。

第三に、北野本は、源氏物語中の場面を入れ換えたり、源語中の和歌を全て引用するなど、中世の源氏物語梗概書と共通する姿勢を持っており、梗概書の歴史を考える上でも重要である。

今後『源氏釈』や源語梗概書を考える際には、北野本は、看過出来ない重要な存在といえるだろう。

注

(1) 勉誠社文庫83（昭和56年2月）。

(2) 拙稿「天理図書館本『源氏古鏡』について」（『中古文学』28号、昭和56年11月）。

(3)「源語之類書筆者之内／一、為家卿／はゝきゝのつゝき也／墨付十二枚」との附箋がある。

(4)『源氏物語と和歌　研究と資料』（昭和49年4月）に、伊井氏による翻刻が収められている。

(5) 他に断簡の形では数点存在し、注目すべきものに伊行自筆稿本竹河巻断簡がある。（久曽神昇氏『仮名古筆の内容的研究』第七章第三節、昭和55年2月）

(6)『未刊国文古註釈大系』第十一巻所収のものによる。以下同。

(7)『源氏物語大成』第七巻所収のものによる。以下同。

(8)『源氏物語大成』第七巻・研究編。『中古文学叢考』第二冊、など。

(9)『源氏物語注釈史の研究』第一章第二節（昭和55年11月）初出は（注4）書。猶、以下に引用する伊井氏の説は、全て本書に依る。

(10)（注9）書、稲賀敬二氏『源氏物語の研究』（昭和42年）など。

（付記）
本稿を成す直接の契機となったのは、所蔵者北野克氏より影印本を恵与され、同本の存在を示教されたことによる。貴重な御本を公刊されたことと併せて、深甚の謝意を表する次第である。